

学術レポート執筆不安尺度の提案
—中国語を母語とする留学生を対象として—Proposal for a Scale to Measure Anxiety when Writing Academic Reports
Based on a Study of Chinese-speaking Students in Japan

田 佳月

要旨

本研究では、日本の大学に在籍する中国語を母語とする留学生を対象に、PAC 分析の手法を使用したインタビュー調査と先行研究を基に、学術レポート執筆不安尺度を作成し、その信頼性を分析した。その結果、22 項目の不安項目が選定され、「日本語表現に対する不安」「文章構成に対する不安」「執筆形式に対する不安」「教員評価に対する不安」「テーマ構想に対する不安」「文献収集に対する不安」の 6 因子構造であることが明らかになった。また、尺度の内部一貫性を検討する信頼性分析では、学術レポート執筆不安尺度の高い信頼性が確認された。

キーワード：学術レポート執筆不安、留学生、尺度、PAC 分析

1. 研究の背景と目的

日本の大学で学ぶ留学生は、与えられたテーマについて論証する内容のレポートを書く活動が多い。これは入学後すぐに求められる課題であるが、日本語力が中上級であっても、日常の身近な話題や時事問題について作文を書くことはできるが、レポート執筆に必要な語彙、文法、表現、文章構成を把握していない場合が多い。文法や表現を正しく使っているかどうか、議論をどのように展開するべきか等、留学生が抱えている不安は少なくない。そこで本研究では、日本の大学に在籍する中国語を母語とする留学生を対象に、レポートを書く際に不安を感じる状況を明らかにした上で、学術レポート執筆不安尺度を作成し、その信頼性を検討していく。

2. 先行研究

第二言語のライティング不安に関連した指摘は、英語教育の分野でも見られる。Cheng et al. (1999) は、外国語環境での英語学習者を対象に、第二言語不安尺度 (Foreign Language Classroom Anxiety Scale) とライティング不安尺度 (Writing Apprehension Test, WAT) を用いて調査し、第二言語不安とライティング不安の構成要因が異なること、会話でも作文でも第二言語学習では自信が不安と大きく関連していることを明らかにしている。Cheng(2004)は、WAT のいくつかの問題点を指摘し、27 項目からなる「第二言語ライティング不安尺度 (Second Language Writing Anxiety Inventory, SLWAI)」を開発

している。各因子は「生理不安」「認知不安」「回避行為」であり、尺度の内的整合性の検討から、SLWAIの高い信頼性が確認されたと述べている。

日本語教育におけるライティング不安に関する研究は石橋(2011)がある。石橋(2011)は、第二言語の作文を対象としたライティング不安を作文不安と呼ぶことにし、バンコクで中上級日本語学習者126名に、SLWAIを一部分日本語学習者用にアレンジしたものをを用い、作文に関わる不安要因の実態、及び成績、習熟度との関連を検討している。その結果、作文不安は「作文産出不安」「作文評価不安」「表現志向」「作文自信」の4因子により構造されており、「作文産出不安」は評価による不安との関連が強く、作文の成績と負の相関があるということが明らかになった。しかしながら、不安尺度として用いられたSLWAIは、英語学習環境で開発されたライティング不安尺度であるため、これを日本国内のアカデミック・ライティング教育場面にそのまま使用することには限界があると考えられる。

本研究では、石橋(2011)の定義に倣い、留学生が日本語でレポートを書く際に抱く不安を学術レポート執筆不安と呼ぶことにし、「第二言語でのレポート産出に関わる不安や心配、それによって引き起こされる緊張や焦り等」と定義する。なお、本研究が取り上げたレポートとは、井下(2013)が分類したレポートの4種類のうち、「④論証型レポート¹」を指す。これは、脇田(2015)が述べたように、論証型レポートは、「専門的な論文を書くための橋渡し」であり、「学術的な普遍性を高めることができれば、論文へ発展することができる」ものであると考えることによる。

3. 調査の方法

本研究は、混合研究法デザイン(Creswell et al. 2007)の調査票開発モデルを用いた。このモデルは現象を探求するために質的データで開始し、次に第2の量的フェーズを作り、質的結果をもとに量的調査票を開発し検証することを目的としている。

第1フェーズでは、2015年1月に、首都圏の大学に在籍する4名の中国語を母語とする留学生(詳細は資料1参照)を対象に、PAC分析の手法を使用したインタビュー調査を行った。このインタビューデータの結果が次の調査票の開発に指針となった。

第2フェーズでは、2015年9月から10月にかけて、日本の大学に在籍する中国語を母語とする留学生105名(詳細は資料2参照)を対象に、質問紙調査を実施し、量的に妥当性を検証した。

4. インタビュー調査の結果

4.1. 調査の手順

インタビュー調査で研究手法として取り上げるPAC分析は、社会心理学と臨床心理学

¹ 論証型レポート：与えられたテーマについて論証する。テーマを絞り込み、資料を調べ、根拠に基づき、自分の主張を論理的に組み立てる(井下2013:24)。

の知見を持つ内藤によって開発された手法で、個人に着目した質的研究でありながら、デンドログラムに基づき、調査協力者自身の枠組で分析するという、再現性・信頼性の高い質的研究の方法である（内藤 2002）。筆者は、PAC 分析が従来のインタビューで採り得なかったような個人の内的世界を深く引き出すことができ、学術レポート執筆不安をより具体的に抽出できると考え、PAC 分析の手法を使用し、不安尺度の項目を作成した。

分析の手順として、まず、4 人の調査協力者に以下の連想刺激文を与えた。なお、ここでいう「レポート」とは論証型レポートであることを調査協力者へ口頭で説明してある。

連想刺激文：あなたは、日本語でどんなレポートを書きましたか。また、レポートを書くとき、どんな気持ちを持ったのでしょうか。心配になったことがありますか。どんなことが心配でしたか。頭に浮かんできたイメージや言葉を浮かんできた順に、番号をつけてカードに記入してください。

次に、カードを重要度順に並べてもらい、カードの組み合わせのイメージの近さを直感的に「1 かなり近い」から「7 かなり遠い」の 7 段階で評価してもらった。その後、統計解析ソフト HALWIN を用い、クラスター分析を行い、産出されたデンドログラムを調査協力者に見せながらインタビューをした。

インタビューをする際の使用言語は、調査協力者が思っていることが自由に表現できるよう母語で行うことが適切であるとされている（丸山他 2007）ため、本研究では母語で行った。インタビューのやりとりは IC レコーダーで録音し、筆者が日本語に翻訳した。以下、< >に入れた部分はクラスターの名づけであり、[]に入れた部分は調査協力者の連想した内容である。「 」に入れた部分は翻訳された調査協力者の発話である。

4.2. 留学生 A のデンドログラムの解釈

まず、留学生 A のデンドログラムの解釈について述べる。留学生 A と筆者で 11 項目からなるデンドログラムを解釈した結果、3 つのクラスターに分けることができた。



図 1 留学生 A のデンドログラム

クラスター1は、3つの連想項目からなっており、〈資料を収集するとき感じる不安〉と命名した。留学生Aはレポートを書く際、先行研究の見つからない場合がしばしばあり、「キーワードで検索してみると、よく違う文献が出てくる」、その原因に関して、「専門用語にあまり詳しくない。間違えたキーワードを入力してしまったせいで、ほしいものが出てこなかったのではないかと心配している」と述べている。また、ネットで論文を検索する際、関係のありそうな論文を見つけても、「内容が読めない。例えば、CiNiiではログインしないとダウンロードできない」。さらに、論文を読んでいる際、「よく全部読み終わっても、内容が理解できておらず、最初から繰り返し読まないといけない。もちろん自分の日本語力にも関係があると思う。つまり、長い文章から必要な情報を見つけ出すのは苦手だ」と述べ、参考資料の収集に苦労している様子が窺える。

クラスター2は、3つの連想項目が存在し、〈日本語の問題〉と命名した。留学生Aは母語でレポートを書くことがあり、レポートの基本的な形式を既に把握しているようであるが、「日本語の論文における句読点の使い方や、注の書き方等は中国語のものと違う。また、色々な論文を読んだが、専門によっても細かい違いがあるようだ。だから、自分で書くときに困ることになる。仕方なく中国語のレポートの形式を真似ようとするが、厳密性に欠けると感じている」とレポートの形式に対する不安を述べている。

また、文法に関して、「テンス、助詞、特に‘は’と‘が’の使い分け、受身形、使役形」がいつも混乱していると語っている。また、漢語の使い方がより難しいと考え、「普段あまり使わないので、レポートを書く際、どういうふうに使えばよいかよくわからない。例えば、‘発展’という語が使役形の方が自然なのか」と述べ、それに対し、和語と外来語の使い方はあまり間違わないと述べている。

クラスター3は、5つの質問項目からなっており、〈レポートの内容に関する不安〉と命名した。[まとめの書き方が難しい]に関して、留学生Aは「日本人がレポートを終える際、よく本論の内容を要約し、問題点と今後の課題について述べていくが、私はこの書き方があまり好きではない。何もはっきりさせていないと感じているからだ。自分の主張をはっきりさせ、力強く終わりたい」と指摘している。また、留学生Aは「日本語でレポートを書く際、気づかないうちに本来の意図から外れてしまい、結局全て削除し書き直さなければいけない」こともあった。

また、クラスター3の[分量が足りない]に関して、「データや例の蓄積が豊富でないため、一応まとまっても、面白みのない論文が生まれるということになりやすい。また、よく指定字数に届かない。中国語で書くと簡単に文章を膨らませられるが、日本語で書くとなかなかできない」と述べており、「提出期限までに書き終わるかすごく焦る」と述べている。続いて、[テーマが決められない]に関して、研究テーマを絞れない悩みと、タイトルを的確に表せない悩みが挙げられている。最後に、[書きたい内容の専門用語が多い]ことも留学生Aを悩ませる要素の一つである。

学術レポート執筆不安尺度の提案
—中国語を母語とする留学生を対象として—

この結果から考察される結果として、留学生 A が日本語でレポートを書く際、①資料収集への不安、②レポートの形式への不安、③日本語の文法への不安、④専門用語への不安、⑤レポートのまとめ方への不安、⑥提出期限までに指定字数を埋められるかという不安、⑦何を書けばいいかという不安、⑧タイトルが決められないという不安、⑨内容の一貫性を保っているかという不安を感じていることが指摘できる。その一方、レポートを書けば書くほど参考資料の探し方の熟練度が上がったり、日本語で考える力を身につけたりすることに対し、不安への肯定的な捉え方も見られた。ある程度の不安が適度の緊張感をもたらすと同時に、学習効果を高めるといえるだろう。

4.3. 留学生 B のデンドログラムの解釈

次に、留学生 B のデンドログラムの解釈について述べる。留学生 B と筆者で 7 項目からなるデンドログラムを解釈した結果、3 つのクラスターに分けることができた。

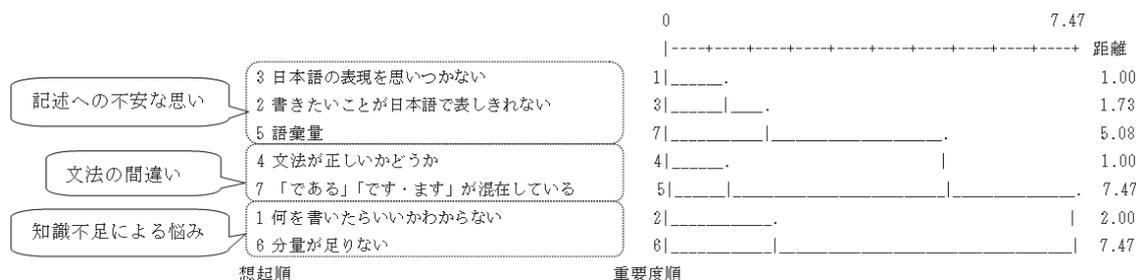


図 2 留学生 B のデンドログラム

クラスター1は、3つの連想項目からなっており、＜記述への不安な思い＞と命名した。留学生 B は高校卒業後家族とアメリカへ移住し、現在は交換留学生として東京都内の大学に在籍している。既に6年以上日本語を学習しているが、それにもかかわらず、「よく中国語を用いてレポート全体の構成を考える。中国語ならうまく表現できるが、日本語に訳すとなると表現が出てこない。語彙量が少ないのは一つの原因になるが、もう一つの原因は、翻訳できないその国の言葉しか表現できないものがある」と述べている。また、「日本語における婉曲表現にまだ慣れていない。アメリカにいたとき、明確に意味を掴める文章を書かなくてはいけなかったが、日本語で書くと、‘かもしれない’や、‘と言われている’によって断言を避けた文章を書くしかない」と述べている。文化の違いが日本語の産出に影響を与えていることが考えられる。

クラスター2は2つの連想項目が存在し、＜文法の間違い＞と命名した。留学生 B は文法を正しく使っているのかという点を心配している。これは留学生 A と同様、文法知識の不足に不安を感じている留学生の傾向であろう。また、レポートの途中から“ですます調”に変わってしまい、「つまらないケアレスミスをしてしまうと恥ずかしい」という点も不安材料として挙げている。一方、文法ミスを防ぐために、「できれば友達に見てもらいた

い。普段はネットで同じような言い方があるかどうか調べる。もしあれば、どんな場面で使われているかを詳しく見て、その特徴を取り出す」と努力している。「3カ国語が話せることがもう十分だと良く言われているが、まだまだ足りないと思う。母語話者に近いレベルまで達しないと気が済まない」と前向きに取り込んでいる姿を見せている。

クラスター3も2つの連想項目が存在し、<知識不足による悩み>と命名した。留学生Bはあるテーマが与えられる際、何を書けばよいのか見当がつかず、よく「クラスメートの書いたものを読んで、そこから新たな発想を生み出す」。また、テーマに対する情報量が少ないため、「書きたいことがいっぱいあるが、書くべきかどうか迷っている。本筋から逸れていないかと心配しているから」と述べ、ネガティブな反応を示している。「レポートの冒頭の書き方を思いつかない」、いつも思い悩んでいることについても語った。

以上により、留学生Bから得られたキーワードとして、留学生Aと重なる部分を除き、⑩考えを表現することへの不安、⑪文体が統一されているのかという不安、⑫レポートで良く用いられる表現がわからないという不安、⑬冒頭の書き方への不安が考えられる。

4.4. 留学生Cのデンドログラムの解釈

続いて、留学生Cのデンドログラムの解釈について述べる。留学生Cと筆者で5項目からなるデンドログラムを解釈した結果、3つのクラスターに分けることができた。

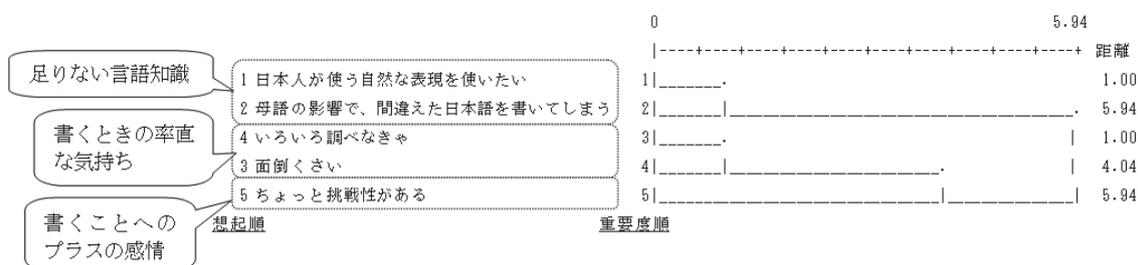


図3 留学生Cのデンドログラム

クラスター1は、2つの連想項目からなっており、<足りない言語知識>と命名した。上位2位の重要度の項目はここに含まれることから、留学生Cがレポートを書く際に感じる一番大きな不安要素であると考えられる。留学生Cは「自然な日本語を使いたい。変な日本語を書いてしまったら、やはり自分の勉強不足だと思ってしまう」と述べながら、「でも、よく中国語っぽい日本語を書いてしまう。または日本語として通じるが、変に聞こえる」点が悩ましい部分であると捉えている。

クラスター2も、2つの連想項目に構成されており、<書くときの率直な気持ち>と命名した。留学生Cは話すことが好きであるのに対し、「中国語で書くのは十分大変なのに、日本語で書くのは死ぬほど大変」と述べている。具体的には、「資料を調べるとき、普通はキーワードで検索するが、私はそのキーワードさえ知らない。まず、キーワードになる

専門用語を調べ、そして、そのキーワードで資料を調べる。すごく手間がかかる」という資料を探す際の煩雑さと、「助詞や、動詞の変形や、受身や、使役等日本語の特有の文法、正しく使っているか」という文法への不安、「書き言葉なのか、話し言葉なのか、ピンと来ない場合がある」という書き言葉への不安、「今受けている授業は、三回の授業に一回の感想文を出す。もし中国語だったら、10分間で済むが、日本語になると、言いたいことがなかなか表現できない」という文の産出への不安が挙げられている。

一方、レポートを書くことへの不安を感じつつ、積極的に取り組んでいこうとする姿勢がクラスター3で窺える。クラスター3は1つの連想項目のみ存在し、<書くことへのプラスの感情>と命名した。留学生Cの解釈は「書けば書くほどうまくなると先生が言ったので、上手く書けるようにチャレンジしたいと思う。最初に短い文から、今はだんだん長い文が書けるようになってきており、成長していると感じている」であった。

留学生Cは、不安を抱えながら、教師の話強く信じ、だからこそそれを乗り越えることが大きな意味で自分の成長に結びつくと感じている様子が窺えた。留学生Cから、新たなキーワードとして⑭書き言葉であるかという不安が得られた。

4.5. 留学生Dのデンドログラムの解釈

最後に、留学生Dのデンドログラムの解釈について述べる。留学生Dと筆者で10項目からなるデンドログラムを解釈した結果、3つのクラスターに分けることができた。

クラスター1は、3つの連想項目からなっており、<不明確な立場>と命名した。留学生Dは常に構成を念頭に置いてレポートを書くが、「テーマをあまり理解しておらず、その上、時間が限られて、十分に調べられないとき、自分なりの論点を思いつかず、レポートが先行研究をまとめたただけのものになってしまう」と述べている。つまり、論点を絞り込めないことが原因で、留学生Dが不安に陥ったと考えられる。また、留学生Dは、結論を支える明確な論拠がないと、レポートの説得力が落ちてしまうのではないかと心配し、「内容的には良いことを述べていても、説得力が薄ければレポートとしての価値が低くなってしまいますので、すごく不安を感じている」と述べている。

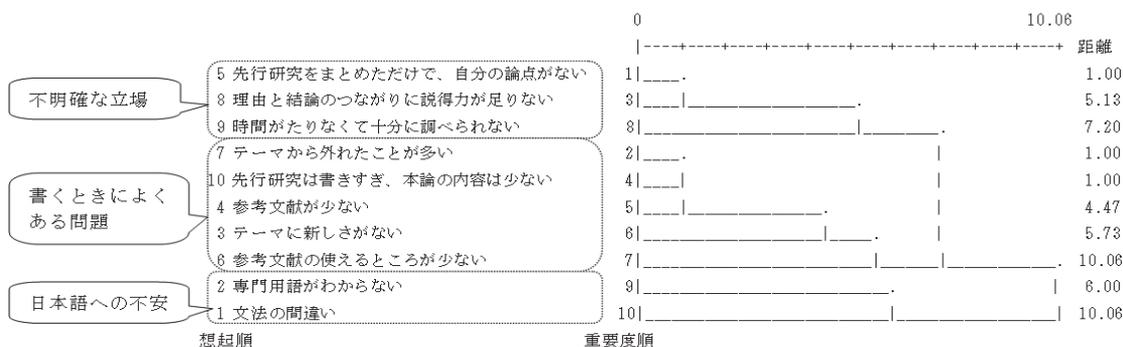


図4 留学生Dのデンドログラム

クラスター2は、5つの連想項目に構成され、〈書くときによくある問題〉と命名した。留学生Dは、「日本語で書くことの複雑性ゆえに」、書いた内容がそもそもの趣旨から離れていないかについて不安を挙げている。また、「時にたくさんの資料を読んで、どちらもレポートにいて先生に見せたいと考えた結果、つい先行研究の部分を指定字数の半分ぐらいまで長く書いてしまい、結局減らさないと仕方がなくなった」と語っている。[テーマに新しさが無い]に関して、留学生Dは「自分の中に知識の蓄積が少なく、それがゆえに平凡なテーマが決まってしまう。ほかの人も同じような視点で書いたらどうしよう、表面的すぎると先生に評価されたらどうしよう」と不安を抱いているようである。そのほか、[参考文献が少ない]と感じたり、[参考文献の使えるところが少ない]と感じたり、資料収集への不安についても言及している。クラスター3は2つ連想項目があり、〈日本語への不安〉と命名した。留学生Dもほかの調査協力者と同様、[専門用語がわからない]という戸惑いと、[文法の間違い]への不安がある。なお、「この2つの項目に対してそれほど不安を感じていない。専門用語や文法の勉強はそもそも段階を踏んで一步一步進めるものだから」と述べており、「いろんなレポートを書くことがおそらくよい経験で、自分の成長にもなるだろう」と述べている。

総括として留学生Dは現在不安があるものの、レポートを書く際に直面する問題を良い経験として乗り越えれば自らの成長につながると考えているようである。留学生Dから、⑮論述の仕方への不安、⑯根拠を思いつかないという不安、⑰引用しすぎているかという不安、⑱教師の評価への不安について述べていると考えられる。

4.6. 結果

上述の留学生4名のインタビューから得られたキーワード①～⑱(本文下線部)と、既存尺度の第二言語不安尺度(SLWAI, Cheng2004)、さらに筆者自身の経験を参考に、不安を感じる状況として質問項目を25項目選定した(表1)。各質問項目の作成の際に着想を得た先行研究の文言及びPAC分析でのキーワードとの対応は資料3の通りである。

質問紙の回答では5段階(1.まったく当てはまらない、2.やや当てはまらない、3.どちらでもない、4.やや当てはまる、5.とてもよく当てはまる)のスケールを用いた。質問紙に回答する際、それぞれの調査協力者が想定するレポートが異ならないように、以下の説明を付け加え、調査協力者にはその状況に従って質問紙に答えてもらった。また、フェイスシートも記入してもらった。

説明：大学で学ぶ留学生は、特定のテーマについて、集めた資料を根拠として、自分の主張を論理的に述べるレポートを書くことが求められます。あなたはそのようなレポートを書くとき、不安や緊張を感じたことがありますか。そのレポートを書く際の不安について、以下の質問をお答えください。

表1 レポート執筆に不安を感じる状況

<ol style="list-style-type: none">1. 難しそうなテーマについて書けるかどうか不安だ。2. 何を書けばいいのかわからなくて不安だ。3. レポートのタイトルが決められなくて不安だ。4. 参考資料が見つからなくて不安だ。5. 多くの資料から必要な情報を見つけ出せるかどうか不安だ。6. 日本語の表記(漢字、カタカナ)を間違っているかどうか不安だ。7. 学術的な言葉を使いたいかわからなくて不安だ。8. きちんと書き言葉で書けているかどうか不安だ。9. 同じ言葉を何度も使い、言い換えることができなくて不安だ。10. 文法を正しく使っているかどうか不安だ。11. 書きたいことが日本語で表しきれなくて不安だ。12. レポートでよく用いられる表現(ex. まとめの表現⇒「...が明らかになった」)がわからなくて不安だ。13. 注の付け方や、引用の仕方、参考文献の書き方などがわからなくて不安だ。14. “である体”と“です・ます体”が混在しているかどうか不安だ。15. レポートの冒頭を思いつかなくて不安だ。16. 冒頭から結論に至るまでに、どういう議論を、どういう順序で書いていくべきかわからなくて不安だ。17. レポートの結論をまとめられなくて不安だ。18. 書いている内容がテーマから外れていないか不安だ。19. 他人の文献を引用しすぎているかどうか不安だ。20. 結論を導くための根拠を思いつかなくて不安だ。21. 先生にどう評価されるか不安だ。22. 分量が足りなくて不安だ。23. いつも文の一部分に時間がかかり過ぎて、なかなか書き進まなくて不安だ。24. 日本の大学の先生と中国の大学の先生と評価の視点が違ってくるのではないか不安だ。25. 提出期限に間に合うかどうか不安だ。

5. 学術レポート執筆不安についての質問紙調査

この調査では、インタビュー調査で得られた不安を感じる状況 25 項目を用い、目標言語使用環境における学術レポート執筆不安尺度を作成することを目的とする。質問紙調査で得られたデータの解析には、統計ソフト SPSS19.0 を用いて因子分析(主因子法、スクリープロットにより因子数を決定、プロマックス回転)を行った。ただし、各項目のうち、因子負荷が 0.40 に満たなかった 3 項目(3、18、20)を削除した。再度因子分析を行い、最終的に 22 項目からなる 6 つの因子が得られた(表 2)²。以上の分析で得られた 22 項目を学術レポート執筆不安尺度とする。

因子 1 は 7 項目で構成されており、レポートを書く際に表記、語彙、文法、表現等日本語表現から生み出された不安に関するもので、「日本語表現に対する不安」と命名した。

因子 2 は 5 項目で構成されており、テーマのもとで問題を立て、それについてどのように論理的・実証的に論を展開するのか、他人の文献を引用しすぎ、自分なりの論点が少なくないか等、レポートの構成という項目からなり、「文章構成に対する不安」と命名した。

因子 3 は 3 項目で構成されており、レポートの文体や引用の仕方、要約の仕方、参考文献の挙げ方、結論のまとめ方等、学術的文章に特有の一定の形式に関するもので、「執筆形式に対する不安」と命名した。

² 便宜上このように分類したが、他の項目との関連については今後検討する。

因子4は3項目で構成されており、教師から良い評価が得られるか、評価基準が中国の大学の教師と違うのか、教師からの評価を気にしすぎて文や表現を繰り返し修正すること等の要素について感じる不安項目でまとまっており、「教員評価に対する不安」と命名した。

因子5は2項目で構成されており、レポートの構想段階において、馴染みのないテーマに自信がない、問題意識が明確になっていない等感った気持ちに関する項目に高い因子負荷量を示しており、「テーマ構想に対する不安」と命名した。

因子6は2項目で構成されており、先行研究を調べる際に、文献が見つからない、大量の文献から必要な情報を見つけ出せない等の不安項目に関わる因子負荷量が高く、「文献収集に対する不安」と命名した。

表2 学術レポート執筆不安尺度の項目と因子パターン行列（プロマックス回転）

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
8.きちんと書き言葉で書けているかどうか不安だ。	.875	.171	-.050	-.151	.038	-.060
7.学術的な言葉を使いたいがわからなくて不安だ。	.833	.143	.061	-.125	-.113	-.025
10.文法を正しく使っているかどうか不安だ。	.811	-.227	-.063	-.041	.133	.162
11.書きたいことが日本語で表しきれなくて不安だ。	.664	.033	-.148	.001	.123	.112
9.同じ言葉を何度も使い、言い換えることができなくて不安だ。	.651	-.082	.040	.250	-.156	-.048
6.日本語の表記を間違っ使っているかどうか不安だ。	.648	-.081	.079	.033	-.081	.109
12.レポートでよく用いられる表現がわからなくて不安だ。	.598	.088	.243	.034	.079	-.117
16.冒頭から結論に至るまでに、どういう議論を、どういう順序で書いていくべきかわからなくて不安だ。	-.122	.892	.119	-.144	.055	.023
15.レポートの冒頭を思いつかなくて不安だ。	-.057	.763	.008	.086	-.028	-.077
19.他人の文献を引用しすぎているかどうか不安だ。	.155	.495	-.210	.069	-.058	.192
25.提出期限に間に合うかどうか不安だ。	.100	.492	-.080	.067	.041	.035
22.分量が足りなくて不安だ。	.078	.484	.070	.106	.087	-.161
14.“である体”と“です・ます体”が混在しているかどうか不安だ。	-.014	-.107	.779	-.141	.098	.141
13.注の付け方や、引用の仕方や、参考文献の書き方などがわからなくて不安だ。	.079	.062	.681	.078	-.183	-.007
17.レポートの結論をまとめられなくて不安だ。	-.115	.220	.485	-.002	.015	.438
24.日本の大学の先生と中国の大学の先生と評価の視点が違ってくるのではないかと不安だ。	-.008	.034	.014	.700	-.132	.081
21.先生にどう評価されるかと不安だ。	-.094	.058	-.170	.686	.074	.160
23.いつも文の一部分に時間がかかり過ぎて、なかなか書き進まなくて不安だ。	.067	.031	.205	.489	.253	-.140
1.難しそうなテーマについて書けるかどうか不安だ。	.010	-.031	-.041	-.017	.851	.007
2.何を書けばいいのかわからなくて不安だ。	-.037	.153	-.005	.005	.641	.041
4.参考資料が見つからなくて不安だ。	.115	-.163	.178	.103	.049	.676
5.多くの資料から必要な情報を見つけ出せるかどうか不安だ。	.050	.412	-.096	.074	-.044	.538
因子寄与率%	32.170	10.136	4.229	3.620	3.365	3.126
累積寄与率%	32.170	42.306	46.535	50.155	53.520	56.647

表3 因子相関行列

因子	1	2	3	4	5	6
1	1.000					
2	.417	1.000				
3	.393	.573	1.000			
4	.352	.525	.494	1.000		
5	.422	.520	.386	.374	1.000	
6	.181	.431	.228	.214	.316	1.000

※網掛け部分はかなり相関のあるところ

学術レポート執筆不安尺度の内部一貫性を確認するために、クロンバックの α 係数を求め、信頼性分析を行った。その結果、因子 1、因子 2、因子 3、因子 4、因子 5、因子 6 それぞれの α 係数は 0.892、0.788、0.742、0.711、0.739、0.692 であり、学術レポート執筆不安尺度の信頼性は十分にあると言える。それぞれの因子相関は高い (表 3)。

6. まとめ

本研究では、日本の大学に在籍する中国語を母語とする留学生を対象に、先行研究とインタビュー調査を基に学術レポート執筆不安尺度を作成し、信頼性を分析した。その結果、レポート執筆に不安を感じる状況 25 項目が得られ、これらを質問項目として調査を行い、因子分析の結果、最終的に 22 項目の不安項目が選定され、「日本語表現に対する不安」「文章構成に対する不安」「執筆形式に対する不安」「教員評価に対する不安」「テーマ構想に対する不安」「文献収集に対する不安」の 6 因子に分けられた。また、尺度の内部一貫性を検討する信頼性分析では、学術レポート執筆不安尺度の高い信頼性が確認された。

7. 今後の課題

本研究で作成した学術レポート執筆不安尺度は、今後の調査への足がかりを築くことができた。しかしながら、測定しきれなかった不安が存在する可能性を踏まえて、尺度を再検討する必要がある。学術レポート執筆不安尺度の妥当性を検討し、不安の実態と留学生それぞれの属性との関係を明らかにすることが今後の課題である。また、教育現場での使用に繋げ、学習者へのアカデミック・ライティング教育に役立てていきたいと考える。

参考文献

- 井下千以子 (2013) 『思考を鍛えるレポート・論文作成法』慶應義塾大学出版会
- 石橋玲子 (2011) 「日本語学習者の作文産出に関わる不安要因の関連」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』8 : pp.25-34
- 丸山千歌・小澤伊久美 (2007) 「日本語教育における PAC 分析の可能性と課題—読解教材を刺激とした留学生への実践研究から—」WEB 版『日本語教育実践研究フォーラム報告』
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版] —「個」を科学する新技法への招待—』ナカニシヤ出版
- 脇田里子 (2015) 「学部留学生を対象にした『段階的アカデミック・ライティングの導入』」『コミュニケーション』4 : pp.35-61
- Cheng, Y.S, Horwitz, E.K., & Schallert, D.L. (1999) Language anxiety: Differentiating writing and speaking components. *Language Learning* 49, pp.419-446.
- Cheng, Y.S. (2004) A measure of second language writing anxiety: Scale development and preliminary validation. *Journal of Second Language Writing* 13, pp.313-335.

Creswell, J.W & Clark, V.L.P. (2007) *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Sage Publications (=2010、大谷潤子訳『人間科学のための混合研究法』北大路書房).

資料1(以下) インタビュー調査協力者の属性(実施時)

	出身	性別	学部	所属	学年	日本滞在歴	日本語学習歴
A	中国	男	日本語	交換留学生	3年	4ヶ月	2年4ヶ月
B	中国香港	男	金融	交換留学生	3年	4ヶ月	6年
C	台湾	女	経済	交換留学生	4年	4ヶ月	4年
D	中国	女	経済	学部生	2年	3年	3年6ヶ月

資料2(以下) 質問紙調査協力者の属性(実施時)

性別	男性	42	日本語能力試験の級	N1	69
	女性	63		N2	32
学部	文系	91	アカデミック・ライティング授業を受けたことがありますか	日本語学校で受けたことがある	18
	理系	14		大学で受けたことがある	33
学年	学部一年	21		受けたことがない	54
	学部二年	9		得意	2
	学部三年	14	やや得意	15	
	学部四年	19	どちらでもない	62	
日本語学習年数	交換留学生	42	日本語で文章を書くことが得意ですか	やや苦手	16
	2年未満(2年間)	34	苦手	10	
	4年未満(4年間)	35	得意	20	
	4年以上	36	やや得意	28	
日本滞在年数	半年未満(半年)	23	中国語で文章を書くことが得意ですか	どちらでもない	46
	1年未満(1年間)	22		やや苦手	7
	3年未満(3年間)	27		苦手	4
	3年以上	33			

*インタビュー調査で協力してもらった4名の調査協力者は除いた。

資料3 質問項目と先行研究及びキーワードとの対応

質問項目	先行研究及びキーワードとの対応	質問項目	先行研究及びキーワードとの対応
1	先行研究を参考に「日本語の作文の課題を出された時上手に書けないことが分かっている」	13	留学生A: ⑫レポートの形式への不安
2	留学生A: ⑩何を書けばいいかという不安	14	留学生B: ⑪文体が統一されているのかという不安
3	留学生A: ⑪タイトルが決まられないという不安	15	留学生B: ⑫冒頭の書き方への不安
4	留学生A: ⑫資料収集への不安	16	留学生D: ⑬論述の仕方への不安
5	留学生A: ⑬資料収集への不安	17	留学生A: ⑭レポートのまとめ方への不安
6	先行研究を参考に「誤字・脱字を見つける」	18	留学生A: ⑮内容の一貫性を保っているかという不安
7	留学生A: ⑭専門用語への不安	19	留学生D: ⑯引用しすぎているかへの不安
8	留学生C: ⑮書き言葉であるかという不安	20	留学生D: ⑰根拠を思いつかないという不安
9	先行研究を参考に「同じことを何度も使わないようにする」	21	留学生D: ⑱教師の評価への不安、及び先行研究を参考に「先生が自分の日本語の作文を評価するのはこわくない」
10	留学生A: ⑯日本語の文法への不安	22	留学生A: ⑲提出期限までに指定字数を埋められるかという不安
11	留学生B: ⑰考えを表現することへの不安、及び先行研究を参考に「日本語で自分の考えをはっきり書くことはできないように思う」	23	筆者の経験を参考に
12	留学生B: ⑱レポートで良く用いられる表現がわからないという不安	24	筆者の経験を参考に
		25	留学生A: ⑲提出期限までに指定字数を埋められるかという不安

(でん かげつ 言語社会研究科博士後期課程一年)